

ベッドシーツには紫煙と汗の香りが染み込んでいた。私は何度も壁が黄ばむから煙草をやめてくれといったのに、この男は聞く耳なんて持たない。

「うん」と生返事をしながら新しい煙草に火をつける。別にラブホテルならいいのよ、いくらでも。でも私の部屋で吸わないで欲しいってだけなの。この前も彼氏にバレちゃいそうだったのよ。そうやって少しむっとした顔をすると昴くんは面倒くさそうに携帯灰皿にまだ長い煙草を押し付けてぐりぐりと火を消した。

昴くん。苗字は確か……トリカイだったかな。でも別にそういうのどうでもいいの。だって私が興味あるのは昴くんの体とステータスだけだもん。港区のタワーマンションに住んでいる金持ち高学歴のイケメン。それと寝てる私。私が好きなのは結局自分なのよ。昴くんだってアクセサリーにすぎないの。

「そーいえばさあ。昴くん、香水変えた？」

ぐちゃっとなった髪の毛を手櫛で梳かしながら問うと昴くんは香水をやめたのだと言う。えー、残念だな。私、昴くんのつけてる香水の香り好きだったのに。今日はあのワイルドな香りじゃなくて、石鹼と柔軟剤のいい香りですてびっくりしちゃった。だから、なんでって聞いてみた。そうしたら昴くんってば「チャラついたものは処分したの」って苦笑しながらそう言うの。だったらまずは煙草からやめればいいのにね。セックスした後に一服するのなんてチャラ付いた男しかしないのに。そもそも今どき煙草なんて流行らないのよ。私だって2年前にやめたし。煙草にかけるお金をネイルと髪の毛のメンテナンス代にあてたいから。

「チャラ男卒業しちゃうわけ？」

「もうアラサーだからな」

「えー？別に年齢関係ないでしょ」

髪の毛を直して、それからベッドに再度潜り込む。昴くんはセフレなんかに腕枕はしない、少し離れた距離で眼鏡をかけなおしてスマートフォンを覗き込む。それから、別の女だか友達だかに返信をしていた。

別に私はそれを嫌だとは思わない。昴くんにとっての私は大勢の中の一人だし、私にとっての昴くんも大勢の中の一人。私達は需要と共有が一致しているからこうして同じベッドに入っているだけ。普段お互いがなにをやっているとかなんかの好きかなんて知らない。知ってるのは体温と好きな体位くらい。あー、後住んでる場所？それくらい。

「あー、もしかして本命と付き合えることになったとか？」

ニヤニヤしながら聞くと昴くんはあっさりと頷いた。

「え、まじで？」

そう、この男は酒の席でぼつりと十数年前から好きな女がいると話していた。こんな身なりなのにそんな一途な恋ができるなんてと最初はときめいたものだ。

「凄いじゃん、でも会えないんでしょその女、どーやって付き合えることになったの？」

「来週からウチに来るんだよ」

ああ、昴くんのこんな嬉しそうな顔見たことないかも。からからに乾いた恋心が少しだけ

きゅんっと潤った気がした。やっぱり顔のいい男の笑顔っていいものね。

「え、まじで？その女ってどんな女なの」

思わず身を乗り出して聞いてしまった。昴くんは自分の事を話さないしピロートークなんてしてくれない人なのに今日ばかりはおしゃべりがしたいみたいでスマホの画面のライトを消して口を開く。

「従妹なんだ」

「へー」

「今年から大学に入るっていうんで田舎から上京してウチから通う」

「え……」

言葉に詰まる。今年大学に入るってことはまだ十代、かなり浪人していたとしても二十台に入ってすぐくらいじゃん。昴くんより十近く下。なんだか少しびっくりしちゃった。もしかしてロリコン？まあ、相手の性的趣向だとか好みだとか私の人生には関係ないし、なによりその話はとっても興味をそそる。だってなんだか下衆の香りがするんだもん。

「なんで昴くんの家から通うの？ふつーさ、一人暮らしでしょ」

「ああ、その子の親が随分と過保護でね、俺の家から通わせるって」

「おかしくない？だって独身アラサーの男の家っしょ？危険じゃん。特に昴くんなんてさあ」

「酷いな、お前」

「えーだって昴くん、お世辞にも優しい男って言えないじゃん。今まで何人泣かせてきたの」

昴くん、たまたま私は利害の一致でセフレとしてこうして関係を持っているけれど、今まで沢山の子をやり捨ててきたはずだ。たしか昴くんを知る友人の話によると、何人もの女に貢がせていたし、一時期はそれだけでかなりの稼ぎになっていたらしいと言っていた。

まあ、この人は女を落として調教して自分好みにするのはとっても上手いタイプだと思う。飴と鞭が上手というか、ああそうだ。洗脳して自分の思い通りに動かすのがとっても上手なんだ。初心で何も知らない純真な子なんて恰好の的だろうな。

「二桁だけどお前よりマシだろ？」

「えー、私一桁だもん。昴くんみたいに貢がせてポイなんてして泣かせてないもーん」

手で口を覆う。左指には彼氏に買ってもらった百万くらいの指輪。でも、こんなものよ私。それに、私は指輪なんて強請ってないの。彼氏が勝手に買ってくれただけ。君にはこれが似合うよって。だから貢がせてるわけじゃないの。勝手に贈り物をしてくれるだけ。今までの男はみんなそうよ。

「で、なんで昴くんの家なんて猛獣の檻に自分の娘を送るのよ、その親」

「そりゃあ、俺がその子とその子の両親からは信用されてるからだよ」

「えー……普段の昴くん見てたら信用なんてできないんじゃないの」

クズの代名詞、クズといえば昴くん。少なくとも私はそう思ってる。薬と殺人以外はだいたいやってきたみたいだし、まーそんな男クズ以外の何者でもないよね。私以外も同じ意見

だって思ってる。

「はは、ま、ずーっと猫被ってたの。だから信用してくれたわけ」

「凄いじゃん、顔もいいし演技力もあるし役者目指せばー？」

「こんな墨入った役者駄目だろ」

「顔がいいのは否定しないんだ」

「するわけないだろ、俺は見た目がいい」

知ってる知ってる。だって面食いの私が最初に見ただけで選んだ男なんだから。ああ、それからセックスが上手そうってこと。金持ちでハイスぺ男っていうのは後から知ったことだし。

「で、その子が家に来るからチャラ男はやめるってことね……あれ？付き合う？家に来るだけでしょ？」

「俺がさ、落とせないと思わけ？」

「あー、はいはい」

昴くんはもう一本煙草を取り出して、火をつけようとして辞めた。本当に習慣なのよね。

「だから、今日で最後」

微笑んだ顔はいつもより少し優しい。

「ふーん。別にいいけど。あーでも昴くんと同じレベルのセフレ作るの難しそうだなー」

顔も良くて、体格も良くてお金持っててセックスも上手くて楽な関係でいられる男。

私が猫を被らなくてもいい男、そんな男中々いないんだよね。みーんな何か欠けてるの。

あー、昴くんは性格がちょっとあれなんだけどそれ以外は完璧。

「思ってたんだけどさ彼氏だけじゃ駄目なわけ？」

苦笑。その顔も結構好きよ。

「彼氏はセックス下手だし、別にかっこよくない」

「じゃあなんで付き合ってるの」

「なんでって、金持ってるしチャホヤしてくれるから」

指輪を蛍光灯にかざす。純金がきらっと光った。

「俺よりお前の方が酷いと思うけどな」

昴くんは起き上がってシャツを羽織る。

「泊まっていけないの？」

「準備しなきゃいけないだろ」

「来週なんでしょ」

「まーそうなんだけどさ」

ボタンを上まで止めて昴くんはベッドから起き上がった。

「ねー、なんで十個近く下の従妹が好きなの？そんなに可愛いの？私よりかわいー？」

最後に意地悪してやろうと思ってニヤニヤ笑う。私は可愛い。昔から美少女としてあがめられ、大人になってからも多くの男が私を放っておかない程度には可愛い。何人もの男が私

昴くんっていう男

を可愛いからという理由でちやほやする。私が落とせなかった男なんていないの。だから、きっとその子よりも私の方が可愛いはず。

昴くんはズボンを履き終えて私に向き直る。

「お前よりずっと可愛いよ」

ああ、なんか悔しいな。こんな優しい顔、私に一度も向けてくれたことないのに。

別にセフレでよかった。この男の本命になりたいなんて思ったことはなかった。けど、それでも悔しい。例えて言うならあれねお気に入りのアクセサリーが盗られてしまったようなそんな感覚。

「ふーん、そっか。お幸せに」

「お前もな」

昴くんはポケットに財布とスマホがあるのを確認してベッドルームを出ていこうとする。

「あのさ」

「ん？」

「その子にふられたら、またセフレになってあげてもいいよ」

昴くんはぷっと吹きだして、それから「考えておく」と言って爽やかに笑った。

知ってる。昴くんは勝算の低い掛け事はしない。勝てる自信のある賭け事にしか乗らないし、そもそもとして勝てるようにゲームを持って行くの。

それに田舎から出てくる右も左もわからない芋女なんて鴨が葱を背負って食べてくださいって来るようなものでしょ。宣言通り落とせないわけないのよ。だって昴くんって私と一緒にだもん。私が狙って落とせなかった男がいないように昴くんだって落とせなかった女なんていないのよ。だから昴くんがこの部屋に来ることはもうなんてない。

ボタンと扉が閉まったのを確認して私はリモートで鍵をかけた。音のしなくなった部屋で彼が残していった煙草の箱から一本取り出して吸ってみる。久々の煙草はやっぱ美味しいくない。

「さよなら昴くん。お幸せに」

そんな思ってもいない戯言と一緒に不味い不味い紫煙を空中に吐きだした。

おわり